

渡辺真弓 著
東京造形大学教授



〈アドリア海の女王〉と盛名を煌めかせたヴェネツィア。栄光に落日が兆した16世紀、パラーディオを初めとして、壮麗な建築の宝石をこの女王に捧げ、時代を超える都市の美学を構築した人々がいた。未来への大いなる示唆の書。

パラーディオの時代の ヴェネツィア

あとがき

本書はアンドレア・パラーディオ(一五〇八―一五八〇)という建築家を通して見た十六世紀ヴェネツィアの建築・都市論であり、また逆に都市ヴェネツィアというフィルターを通してことによってより立体的に眺めることができたパラーディオについての本でもある。

ヴェネツィアが海洋貿易国家として繁栄の頂点にあったのは、十四世紀から十五世紀半ばまでのことであった。十五世紀後半にはオスマン・トルコの脅威が増大し、また地理上の発見による貿易ルートの変化なども現れる。ヴェネツィア人は東地中海における貿易活動を縮小し、手工業や本土側での農園経営などに資本を分散せざるをえなくなるのである。十六世紀は経済的には下り坂で、周辺の国々との摩擦も絶えず、あきらかな逆風のなかであったが、ヴェネツィア共和国は政治、外交、インフラ整備などのあらゆる面で努力を重ね、この時代を文化的な絶頂の時代に変えることに成功する。特にヴェネツィアという都市の美化に力をいれ、続く何世紀にもわたって文化都市としてゆったり生き残っているだけの建築的遺産と都市景観を確保したのである。その過程に貢献した建築家たちの活動の跡を描くことが本書の大きな目標であった。

パラーディオについては長年にわたり研究を続けてきたが、正直なところ本書を準備しているあいだに、彼に対して抱いていたそれまでのイメージはかなり劇的に変化していった。パラーディオの名声は主としてヴェネトの田園に散在する数々の美しいヴィラによるもので、内陸の都市ヴィチエンツァを中心に活躍し、古代ローマに範をとりながら独自のシステムティックな設計手法を編み出し、ヴィラやパラッツォなどの住宅作品を二五七〇年出版の名著『建築四書』に多数掲載したことで後世に大きな影響を与えた建築家、というのが主要なイメージであった。教会建築ばかりのヴェネツィア時代は晩年の付録であるかのように漠然と位置づけていたのである。しかし今回、この本のもとになった論文を書くために半年間ヴェネツィアに住んで、パラーディオのことを調べ直していくうちに、彼がヴェネツィアに対して抱いた野心を納得できるようになった。また、宗教改革の時代におけるカトリック側の要請に応じて彼が教会建築で行なった革新が、その後のヴェネツィアの教会建築の定石となっていたこともよく理解でき、何よりパラーディオとその周辺の人々の姿をより生き生きと感じられるようになった。それは、ヴェネツィアという都市が過去と続きであり、とりわけ十六世紀の建物は今でもヴェネツィアでは一番幅をきかせているからである(本書でも頻りに触れたように、庁舎、裁判所、美術館など、公共建築に用途変更され活用され続けている建物は十六世紀のものが一番多い)。ヴェネツィアにいると十六世紀はさほど古い過去の時代とは思えなくなる。そのためヴェネツィアというフィルターを通すとパラーディオ像が立体的に浮かび上がるような感触を得ることができたのである。

こうしてヴェネツィアにおけるパラーディオに関してはほぼ全体像を捉えることができたような気がするが、著者の力量と知識量の限界から、サンソヴィーノ、サンミケーリ、ダ・ポーンテその他の建築家たちの姿はラフスケッチ程度にしか描けなかったことを認めざるをえない。もちろんすべての登場人物を等しく扱うことは不可能であり、ここではパラーディオを主役、他は脇役に配して十六世紀ヴェネツィア共和国の建築状況を語ったとみていただきたい。しかし、書き終えて思っているのは、ヴェネツィアこそ意思をもった生き物のような存在であり、ここでこの真の主人公だということである。ドージェ(総督)はもとより政治を司る貴族たちも、また建築家たちも、所詮はヴェネツィア共和国の栄光と存続のために奉仕する存在にすぎなかったとすら思えるのである。

■体裁 A5判 上製カバー装 口絵1丁
■折り込み1丁 本文376頁 挿図215図
■定価 8,400円(本体8,000円+税)

ISBN978-4-8055-0615-8 C3052

中央公論美術出版

<http://www.chukobi.co.jp>

〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-7

電話 03-3561-5993 FAX 03-3561-5834

お取り扱い

目次

序章 ヴェネツィア共和国の十六世紀

斜陽の時代の輝き／パラディオとヴェネツィア／本書の構成 [註]

第1章 「リアルト橋」をめぐる

1. 「リアルト橋」略史／リアルト地区／木造のリアルト橋／リアルト橋建て替え計画
2. パラディオの「リアルト橋」計画案／リアルト橋第一案／ヴェネツィア進出のためのその他の試み／リアルト橋第二案
3. パラディオとその他の橋／『建築四書』に登場する橋／木造橋／石造橋
4. 実現された「リアルト橋」／アーチの数をめぐる議論／ダ・ポンテの橋
5. 時空を越える橋／パラディアン・ブリッジ／描かれた架空の橋／歴史の中の二つの橋 [註]

第2章 パラディオと共和国の三つの都市

1. テッラ・フェルマの二つの都市／生地パドヴァ／パドヴァからヴィチェンツァへ
2. 「建築家パラディオ」の誕生／トリッシノによる教育／パドヴァでの知的交流／最初の公共建築
3. 街路の装置としてのポルティコ／「ポルティコのある街」パドヴァ／パラディオのポルティコ観／ヴィラとポルティコ
4. 「都市の装飾」としての建築／ポルティコの有無／ヴィチェンツァ人の郷土意識／パラディオの都市意識／パドヴァの場合
5. ヴィチェンツァの特異性／「パラッツォの街」ヴィチェンツァ／劇場のような街／パドヴァとの違い
6. ヴェネツィアへの関心／ヴェネツィア貴族との出会い／ヴェネツィアとテッラ・フェルマ／パラディオのヴィラと施主との関係 [註]

第3章 十六世紀ヴェネツィアにおける「都市改装」

1. 時代背景／社会経済情勢の変化／種々の問題
2. 都市整備の過程／ヴェネツィアの二つの中心／サン・マルコ広場周辺／サンソヴィーノの主要三作品／セルリオの舞台背景論／広場を囲む建物
3. 海洋都市国家の特性／軍事建築家としてのサンミケーリ／アルセナーレの発展と整備／水利行政局長サッパディーノ／コルナーロによるサン・マルコの入り海整備構想／ラゲーナに浮かぶ都市の概形 [註]

第4章 パラディオのヴェネツィア進出

1. ヴェネツィアのバラッツォ／パラディオの住んだバラッツォ／サンソヴィーノとサンミケーリの作品／幻のバラッツォ計画案
2. 宗教建築への導入／ダニエーレ・バルバロの存在／サン・ピエトロ・ディ・カステッロ
3. カリタ修道院／最初の大規模な仕事／『建築四書』の図版の謎／後世の評判／修道院から美術館へ [註]

第5章 ヴェネツィアにおけるパラディオの主要三作品

1. サン・フランチェスコ・デッラ・ヴィーニャ／設計依頼の経緯／ファサードにおける革新／サンソヴィーノの教会
2. サン・ジョルジョ・マッジョーレ／真正さをめぐる議論／高い柱台に関する考察／内部空間の魅力
3. イル・レドントーレ／ベスト鎮静祈願の聖堂／建築的洗練／イスラーム建築の影響／マゼルのテンピエット建設の意味 [註]

第6章 ヴェネツィアにおけるパラディオのその他の仕事

1. 二つの小教会／サンタルチャーアとレ・ヰィテッレ／浴場窓のモチーフ
2. その他の活動／アンリ三世歓迎式典のアッパレート／パラッツォ・ドゥカーレ再建計画／ポローニャのサン・ペトロ・ニオ聖堂のファサード案
3. 書物の出版／二冊のローマ案内書／『建築四書』／『カエサル回想録』 [註]

終章 ヴェネツィア共和国の建築家たち

1. 本書に登場した建築家たち
2. パラディオのヴェネツィアにおける役割／教会デザインにおける革新／サンソヴィーノとの対比
3. 出版物の効果
4. 誇り高きヴェネツィア [註]

付録

パオロ・グアルドによるパラディオ伝(翻訳) [註]

あとがき／参考文献／図版出典／索引

著者略歴

渡辺真弓(わたなべまゆみ)

東京大学工学部建築学科卒業、同大学院工学系研究科修了(建築史専攻) 博士(工)

1976～77年 イタリア政府給費留学生としてパドヴァ大学に学ぶ

1979年 東京造形大学専任講師(助教授を経て1993年より教授、現在に至る)

2005年10月～2006年3月 ヴェネツィア建築大学で研究に従事

著書・著作：『石は語る・建築は語る』(ほるぶ出版)、『透明な秩序・アクロポリス』(共著、六耀社)、『ルネッサンスの黄昏・パラディオ紀行』(丸善)、『西洋のインテリア』(『インテリア大事典』所載、彰国社)、『アルヴィーゼ・コルナーロとジョヴァンニ・マリア・ファルコネット：十六世紀パドヴァの人文主義者と建築家』(『建築史論叢』所載、中央公論美術出版)、『ルネッサンスの黄昏・パラディオ紀行』(丸善)、『パラディオとヴェネト地方の建築』(『世界美術大全集』第13巻所載、小学館)、『図説・西洋建築史』(共著、彰国社)など

訳書：C・ヒッパート著『歴史の都の物語』上下(共訳、原書房)、W・リプチンスキ著『完璧な家：パラディオのヴィラをめぐる旅』(白水社)など